

会話に見られる沈黙の解釈の多様性

—語用実践行為として捉える沈黙—

種市 瑛（横浜市立大学）

1. はじめに

本研究は、沈黙に関する主要な先行研究における議論を概観した上で、沈黙を「語用実践行為 (pragmatic act)」(Mey, 2001) にもとづき、個々の会話参加者の視点から同一の沈黙に対する解釈の多義性について論じる。沈黙を行為として捉える主要な先行研究では、「言語行為論 (speech act theory)」(Austin, 1962; Searle, 1969, 1979) や「ポライトネス理論 (politeness theory)」(Brown & Levinson, 1987) といった理論的枠組みを用いた分析、考察が多く見られる。これらの枠組みにもとづく研究には、沈黙を「話し手」の「意図」という視点にもとづき捉えているという特徴がある。本研究はこのような沈黙についての一義的な解釈論に対し疑問を提示するとともに、事例分析をもとに沈黙の解釈に見られる多義性を示すことで、より現実にそくした沈黙の解釈枠組みの構築を目指す。このような試みは、コミュニケーションにおける沈黙を捉えることの意義の再考につながると考えられる。

2. 沈黙の解釈

沈黙を「言語行為」として捉えた研究 (e.g. Jaworski, 1993; Kurzon, 1998; Saville-Troike, 1985) では、「発語内の力 (illocutionary force)」に注目し、沈黙により何が伝達されたのかについて考察する傾向が見られる¹。このような沈黙の使用は、言語や文化に関係なく普遍的に観察されるものである (Jaworski, 1993; Saville-Troike, 1985; Sifianou, 1997)。また「ポライトネス理論」をもとに沈黙を捉えた研究 (e.g. Nakane, 2007; Sifianou, 1997) は、沈黙を会話参加者間の良好な人間関係を構築する行為として捉えている。沈黙は「フェイス威嚇行為 (face threatening acts; FTA)」となるだけでなく (Brown & Levinson, 1987, p. 295)、フェイスを侵害する行為にもなり得る² (Saville-Troike, 1985; Sifianou, 1997; Tannen, 1985)。

これらの理論的枠組みの特徴として、行為を一義的に捉えていることが挙げられる。すなわち言語行為論では、「話し手」の「意図」として行為を解釈することに繋がり (e.g. Mey, 2001; Verschuren, 1999)、またポライトネス理論でも同様のことが行われている (e.g. Eelen, 2001; Sifianou, 1997)。しかしながら行為の働きは、話し手の意図が決定しているわけではない。すなわち聞き手がどのように行為を理解するのかについて検討することは、話し手が行為に込めた意図を分析することと同じように重要な意味を持つ (Bilmes, 1993)。沈黙に関して言うならば、音声に伴わないため、発話よりも意図を解釈するのが難しい傾向がある。そのため先行研究でも、沈黙が必ずしも意図された通りに解釈されるわけではないことが指摘されている (Davis, 1998; Nakane, 2007)。さらに言えば行為者が明確ではないため、誰が沈黙者であるのかについても相違が見られることがある (種市, 2017)。

代表的な沈黙者を検討する際に用いられる枠組みには、Sacks, Schegloff, & Jefferson (1974) および Levinson (1983) が挙げられる。彼らは会話参加者の誰に「発言権 (floor)」があるのかに注目し、沈黙を4種類に分類した。第1に「ポーズ (pause)」とは、同一話者の発話間に生じる沈黙を指し、その話者に属するとされている (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p. 715)。次に「話者交替 (turn-taking)」の際に生じる沈黙は「ギャ

¹ 例えば質問、約束、否定、警告、脅し、侮辱、依頼、命令を伝えたり (Saville-Troike, 1985)、謝罪や拒否、不満、疑問を提示したりする (Sobkowiak, 1997, p. 46) ことが、先行研究で挙げられている。

² すなわち、相手に対して好ましくない負担や衝突、困惑を与えないようにするための行為 (i.e. 「FTAをするな (Don't do the FTA)」) となり得るとともに (Brown & Levinson, 1987; Jaworski, 1993; Jaworski & Stephens, 1998; Sifianou, 1997)、尊敬や好意を伝えるため (i.e. 「ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)」) や相手と距離をおくため (i.e. 「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」) の行為にもなり得るとされる (Sifianou, 1997)。

ップ (gap)」と言われ、誰による行為でもないと言われる (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p. 715). また誰もターンを取らないために続く沈黙は「ラプス (lapse)」と称され、ギャップとは区別されている (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974, p. 715). 最後に「意識的／限定的沈黙 (significant / attributable silence)」とは、現在の話し手が次の話し手を指名した後、次の話し手がターンを取るまでに生じる次の話し手による沈黙のことである (Levinson, 1983, p. 299).

この分類では、発言権を持たない会話参与者による沈黙という行為の遂行という視点が欠けている。沈黙とは、話し手に加え聞き手も黙ることにより生じる。したがって本来、沈黙は特定の会話参与者に帰属するものではなく、全ての会話参与者に帰属しうるものである。この点を踏まえると、この分類をもとに「聞き手」という立場から沈黙を検討するには限界があると言える。

そこで本研究では、Mey (2001) にしたがって沈黙を「語用実践行為」の枠組みにて捉える。語用実践行為の枠組みでは、行為を相互行為の中でコンテキストにより状況づけられ、意味が付与される「語用実践素 (pragmeme)」として捉えられ、個々の会話参与者たちが持つ、その状況に対しての理解、およびその行為がその場で果たしていると考えられる効果によってのみ行為を解釈する³ (Mey, 2001, p. 221). したがってこの枠組みにもとづくと行為を必ずしも一義的に捉える必要はなく、沈黙に見られる多義性を積極的に容認できるようになる。それによりコンテキストに根差した、より説得力があり現実にもくした沈黙の分析が可能となる。

種市 (2017) では語用実践行為の枠組みにもとづき、Sacks, Schegloff, & Jefferson (1974) および Levinson (1983) による分類に聞き手視点の沈黙 (i. e. 「ミュート (mute)」, 「リンガー (linger)」) を加え、意識的・限定的沈黙を「ベール (veiled)」と変更することにより刷新を行った。新分類は図 1 の通りである。

沈黙前の話し手	語用実践体としての沈黙	沈黙後の話し手
A	ポーズ (A による行為)	A
	ミュート (B による行為)	
A	リンガー (A による行為)	B
	ベール (B による行為)	
	ギャップ (誰の行為でもない沈黙)	
A	ラプス (誰の行為でもない沈黙)	A/B

図 1 語用実践行為としての沈黙の分類

ミュートとは、同一話者の発話間に生じる異なる会話参与者による沈黙であり、リンガーとは話者交替が見られた場面に生じる話者交替前の発話者による沈黙である。またベールとは、話者交替が起こった際に話者交替後の発話者に帰属する沈黙である。この分類は、会話中に生じる沈黙が誰によるものなのかの可能性を示すための枠組みであり、従来の沈黙を一義的に同定するような枠組みではない。したがって同一の沈黙であっても、個々の会話参与者が相互行為の中でどのように状況づけ、意味を付与するのかにより、異なる解釈を提示することも可能になる⁴。

3. 研究方法

本研究では語用実践行為としての沈黙の分類を分析に用い、個々の会話参与者の立場から同一の沈黙がどのように解釈され得るのかについて検討する。その際、行為者の属性や会話参与者間の関係に加え、前後の発話の形式や意味、その場の状況に着目した分析を行う。その上で、沈黙がどのような視点から、どのように意味付けされ得るのかについて検討することで、沈黙の解釈枠組みの構築を試みる。

³ 語用実践行為に関する代表的な論考には、Mey (2001, 2010) や Capone (2005) が挙げられる。

⁴ 本研究では会話参与者に注目した議論を行うが、解釈者には例えばトランスクリプト作成者や研究者も含まれる。それぞれの解釈者は、必ずしも会話参与者と同様の沈黙の意味付けをするとは限らない (種市, 2017)。

データには、発表者が作成した教員と学生の間に見られるやりとりを用いる。作例に対する分析は、実際の会話でないため妥当性や根拠にかけ、恣意性を孕むという欠点を持つ。しかしながら生データと比べて状況を単純化することができ、議論に明瞭さを持たせることができるという利点を持つため、沈黙の解釈枠組み構築に向けた基礎研究として適切であると考え、作例の分析を行った⁵。

4. 事例分析

事例は授業中のやりとりの一場面を抜き出したものである。授業開始時に前回の学習内容についての確認が、教員（T）から学生（S1）に対して行われた後に沈黙が生じた。その後、教員が別の学生（S2）を指名し、同じ質問をしたところ、その学生が返答する。この状況に見られる沈黙は、教員の発話間に生じた沈黙であるため、教員によるポーズであり、学生によるミュートでもあると考えられる。

- 1 T: じゃあ前回の授業内容を思い出してみよう。
- 2 T: アメリカが独立した年はいつだったか覚えてる？
- 3 (S1の名前) さん？
- 4 S1: (Tを見る)
- 5 (5秒の沈黙)
- 6 T: わからないかな？
- 7 じゃあ(S2の名前) さん、どうかな？
- 8 S2: 1776年。

教員の立場から見た場合、5行目の沈黙はS1が話さないことによって生じたS1によるミュートとして捉えられている可能性がある。この場合、沈黙は2種の異なる意味を持っていると考えられる。第1の解釈は、S1が2行目の質問の答えがわからなかったために生じたというものである。前回の授業内容の確認であるため、S1は勉強した内容を忘れてしまっていたと言える。そのためこの沈黙は、TにとってS1の復習不足に起因するものであると解釈され得る。第2にこの沈黙は、学生が先生の話聞いていなかったために起こったとも考えられる。1-2行目でTが話している最中、S1は授業に集中しておらず、Tの話を聞いていなかったために質問がわからなくなったとも言える。したがって5行目は、Tからすると学生のやる気のなさにもとづくミュートであったとも捉えられる。このような沈黙に対する否定的な意味付けは、「授業」という状況と教員の「役割」に関係していると考えられる。授業という枠組みにおいて教員は授業内容を教えるだけでなく、学生を評価するという役割を持つ。また既習事項に関する確認場面において学生は、適切な答えを提示することが期待されている。そのためS1による沈黙はTの期待を裏切る行為に繋がりがねない。その結果、このミュートは否定的に捉えられたものと言える。ただし授業は教員と学生がともに作り上げるため、学生の返答を促すために教員が沈黙をし、返答を待っていた側面もある。この場合、5行目はTによる学生の授業参加を求めるポーズであったとも言えるだろう。

しかしながら学生からすると5行目の沈黙は、必ずしも否定的な意味をもつものではないと推察される。S1は質問の答えをうろ覚えであったため、答えを間違えたら恥ずかしい思いをするという気持ちがあったかもしれない。したがって質問に返答することに対して躊躇したために生じた沈黙であったという解釈も可能である。また既習事項の確認であるためS1は、答えを思い出そうとするために沈黙をしたとも捉えられる。このように考えるとS1にとっての沈黙の意味付けは、必ずしも否定的なものであったとは言えない。むしろS1は授業に参加しようとするために沈黙をしていることから、S1にとって積極的な行為であったとも考えられる。ただし答えがわからないために、時間をやり過ごすためにS1が黙っていた可能性もある。この場合、5行目は話者交替を促すためのミュートであったとも捉えられる。学生視点で沈黙を考えた場合、学生の「心理的状態」が解釈に影響を及ぼしていると言える。学生にとって教室は学習するための場というだけでなく、他の学生と繋がる場の1つでもある。そのような場で否定的な誤った返答をするといった評価を下げることをすることは、自分のフェイスを侵害する行為にもなりかねない。その結果、学生は発言することを避けたと考えられる。

以上の分析から、教員と学生のそれぞれの視点から沈黙を捉えた場合、相反する意味付けがなされる可能性がある。その背景には、教員と学生の間で「教室」という場の捉え方に違いがあることが示唆された。ただし教室

⁵ なお本研究では紙幅の関係で言及できないが、種市（2017）では実際に収録した会話に見られた沈黙を個々の会話参加者の視点から分析を試みた。その結果、会話参加者はそれぞれの立場から同一の沈黙に対し、異なる意味付けがなされることが明らかになった。そこで得られた知見も参考にし、本研究で用いる事例の作成や分析、考察を行う。

では、授業を運営するのは教員であり、また学生は教員のつけた成績によって進学や就職といったその後に影響を及ぼすことから、一般的に教員の解釈が学生の解釈よりも優先されていると思われる。

5. おわりに

語用実践行為にもとづく沈黙の解釈枠組みを用い、事例分析を行ったところ、同一の沈黙に対して会話参加者間で異なる解釈を示すことに加え、同一人物であっても複数の意味付けをすることが示唆された。また沈黙を捉える際に参照された視点に注目すると、それぞれの会話参加者の間で相違が見られることも明示された。さらに個々の沈黙の解釈を比較すると、その場で中心となっているものとそうでないものがあると考えられる。このような主要な沈黙の解釈は、従来の研究で言われていた話し手というよりも、その状況の中で主要な役割を担う人の視点に依存しやすい傾向があると推察される。

本研究は沈黙を解釈するための理論構築に向けた1つの試みであり、今後、さらに生データでの分析をもとに解釈枠組みを修正する必要がある。そのため本研究の結果を一般化することは難しいが、本研究は従来の研究に顕著に見られる沈黙を一義的に捉えるような議論を批判的に捉え、沈黙の多義性を捉えるための1つの基礎研究となり得ると考えられる。

参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bilmes, J. (1993). Ethnomethodology, culture, and implicature: Toward an empirical pragmatics. *Pragmatics*, 3, 387-410.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Capone, A. (2005). Pragmemes (a study with reference to English and Italian). *Journal of Pragmatics*, 37 (9), 1355-1371.
- Davis, W. A. (1998). *Implicature: Intention, conversation, and principle in the failure of Gricean theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, G. (2001). *A critique of politeness theories*. London: Routledge.
- Jaworski, A. (1993). *The power of silence: Social and pragmatic perspectives*. Newbury Park, CA: Sage.
- Jaworski, A. & Stephens, D. (1998). Self-reports on silence as a face-saving strategy by people with impairment. *International Journal of Applied Linguistics*, 8 (1), 61-80.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Cambridge: Blackwell.
- Mey, J. L. (2010). Reference and the pragmeme. *Journal of Pragmatics*, 42 (11), 2882-2888.
- Nakane, I. (2007). *Silence in intercultural communication*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kurzon, D. (1998). *Discourse of silence*. Philadelphia: John Benjamins.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Savielle-Troike, M. (1985). The place of silence in an integrated theory of communication. In D. Tannen, & M. Savielle-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp. 3-18). Norwood, NJ: Ablex.
- Searle, J. R. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sifianou, M. (1997). Silence and politeness. In A. Jaworski (Ed.), *Silence: Interdisciplinary perspectives* (pp. 63-84). New York: Mouton de Gruyter.
- Sobkowiak, W. (1997). Silence and markedness theory. In A. Jaworski (Ed.), *Silence: Interdisciplinary perspectives* (pp. 39-61). New York: Mouton de Gruyter.
- 種市瑛 (2017). 行為としての沈黙についての語用論的考察：解釈の枠組みの構築に向けて 立教大学大学院博士論文.
- Tannen, D. (1985). Silence: Anything but. In D. Tannen, & M. Savielle-Troike (Eds.), *Perspectives on silence* (pp. 93-111). Norwood, NJ: Ablex.
- Verschueren, J. (1999). *Understanding pragmatics*. London: Edward Arnold.